



2011年 6月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 32

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 24 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 東日本大震災以来、人々を元気付け、特に被災者の方々に向けての国民の気持ちを代弁してくれる様な力強いコマーシャルが流れています。

あなたはどんな時でも一人じゃない

僕らがみんなついています

(中略)

長い道のりになるかもしれんけど

みんなで頑張れば絶対に乗り越えられる

日本の力を信じてる

最近、贅沢・飽食に慣れきった私達ですが、互いに助け合い、日本人が一人一人の強さ、優しさ、利発さを持ってすれば、必ず頑張れる・・・私もそう思います。

会長 > 人間は環境に順応する動物ですから、生き延びてきたのです。飢饉・自然災害・寒冷・猛暑・伝染病・年貢の取立て、そういうものに耐えて生き延びてきたのです。ただし、そういう苦しみを忘れやすい動物でもあります。今回の災害を忘れず、百年以内に同じ規模の災害が起きる可能性を考えておく必要がありますね。十五万人の避難所生活の方々がいちばん憂鬱なことは、そのことではないか、そう思います。大多数の人が、低地に住んでは駄目だと思っているのに、結局は、もとの場所に住むことになる。災害が繰り返されないよう、安全な場所で、一日も早く元の生活に近づいていただきたいです。

高橋 > 本当にそうですね。一人ひとりがこの大災害を忘れることなく、次なる災害に備えねばなりませんね。それでは、本題に入らせて戴きます。
本日は、「夏の詠物」の部があと少し残っていますので、それをご解説戴いてから、いよいよ「秋の天文」へ参りたいと思います。では、「夏の詠物」、御指導よろしくお願い致します。

擬許六

牽入れて馬と涼むや川の中 五明

川中島に行脚して

芭蕉様の脛をかぢって夕涼 一茶

祝當選

えらい人になったそうなと夕涼み 子規

耳不聞悪聲目不見異象

首なくて涼しかるらん石地藏 紅緑

会長 > 「牽き入れ……」、
馬に水浴をさせている風景ですが、牽かれている。ただし、人と馬を繋いでいるのです。だから牽きてが馬に牽かれて涼んでいるという可笑しさです。

「芭蕉様の……」、
芭蕉の句が話題になったのでしょう。考えてみれば諸国行脚していても、芭蕉翁の句を話題にしたりして、飯のタネにしているわけで、言わば芭蕉の脛かじり。

「えらい人……」、
選挙に出て当選。ところが夕涼みは普段と変わらぬステテコ姿。子規はステテコ姿で当選祝を言っているのですが、ちっとも尊敬などしていない。

「首なくて…」、

首がないから見えない聞こえない、そういう石地藏を拝んだんですね。首がなければ涼しいだろう言われれば、その通りです。

高橋 > 成る程！客観的に見ると、人間が馬に牽かれて川中で夕涼みしているかの様に見えますよね。

そう言えば、会長の客観写生の素敵な句がありましたね。初めてこの句を見た時、こんな見方もあるんだなと驚いた思い出が…

大根を地球と奪ひあつてゐる 健

一茶の行脚が、いわば芭蕉の脛かじりで行われたというのも面白いですね。現代の芭蕉や一茶や虚子の研究者達も皆、古人の脛かじり…(笑)。

頭のないお地藏様を拝んだら、ハートで受け入れてもらえるのでしょうか…？いずれにしても、目に浮かぶようなご解説、有難うございます。

「夏の詠物」を続けますね。

題蕪村像

雲の峰立つかとぞ見ゆ御つむり 挿雲

擬木導

折鶴に入るる蛭や尻の穴 五明

子規の奥州歸に

夏瘦や是れ松島の松の方 鳴雪

題我肖像

嗚呼老矣夏瘦にては候はず 鳴雪

会長 > 「雲の峰…」、
これは、蕪村像の頭の上に雲の峰があり、「峰雲におつむり押さえられ蕪村」ということですね。

「折鶴に…」、
昔は、折鶴にホタルを入れて光を入れて楽しんだのでしょうか。知りませんでした。抜群の楽しみ方ですね。

「夏瘦や…」、
子規さんがくたびれて、痩せて松島の松みたいだと、いうのでしょうか。鳴雪は子規の大先輩ながら、子規の俳句の弟子という立場を生涯忘れずに、子規を顕彰し続けた方ですね。

「嗚呼老矣…」、
子規を松だとしながら、鳴雪は自分のメタボを恥じているのです。子規のように痩せれば、優れた文学者になれるのに、こんなにメタボじゃ無理だと思っているのです。

高橋 > 子規は夏瘦せで、鳴雪は自らを夏瘦でなく老いの為に…、つまり二人とも痩せていたのかと思ってましたが。
鳴雪は自らは、メタボだと！うーん！成る程！
師のご解釈、勉強になります。

あと二句で夏の部もやっと終わりですよ。

某寺にて

みじか夜や木賃もなさてこそはしり 惟然

訪紅緑

木魚なんと叩いて君は涼しげや 墨水

会長 > 「みじか夜や…」、
木賃は燃料費だけを払う安宿ですが、木賃も用意できなくて歩き続けているうち、夜が明けてしまったと、いうことですね。

「木魚なんと…」、
紅緑は変人だったそうですから、暑いので木魚を叩いて、是で涼しくなるよと、平然としていたのですね。その息子の、サトウハチローも変人で、夏は全裸で生活していたので、出版社の女性編集者は嫌がったそうですから。

高橋 > 木魚と言えば、漱石の有名な句、

叩かれて昼の蚊を吐く木魚かな

この句がすぐ頭に浮かびますが、そう言えば、これも夏の句でしたね。やっと「夏の部」が終わりました。次は秋の部「天文」からとなりますが、少し覗いてみましょうか。ご解説下さいね。

秋の部の最初の季語は、「星合」、「星迎」、「七夕」です。星合は星祭のことですね。

星合のそれにはあらしよばい星 左繡

星様のささやき給ふけしき哉 一茶

禪に笛つきさして星むかひ 一茶

にたほしの似た星に照る情哉 大江丸

しのぶれどあの光なり星の恋 大江丸

会長 > 「星合のそれ……」、
夜這星は牽牛でも織女でもない、庶民的な星だとしています。夜這いは、一般的に行われていた風習ですね。

「星様の……」、
星の「またたき」は、「ささやき」とした一茶の感性というか詩心には敬服しますね。だるま星のおしやべりぺちやくちやと 松本たかしでしたか。ささやきよりも激しいまたたきです。

「禪に笛……」、
笛を吹いていたのでしょうか。私もオカリナ吹きますから、今度やってみましょう。
オカリナをポッケにしまひ星迎 健

「にたほしの……」、
「にたほし」とは、同じように見える星ということです。そうした星にも魅かれ合うものがあるだろうと、星の世界のロマンを詠っています。

「しのぶれど……」、
夜空を見上げて、恋する星は隠しても光ると、古歌を引用しています。
忍ぶれど色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで(『拾遺』)

高橋 > 会長のオカリナですか。いいですね。星空の下では是非お聞きしたいものですね。
次の季語は、「稻妻」と「露」です。
よろしくお願い致します。

稻妻やうつかりひよんとした貌へ 一茶

朝露や我鼻ねぶる牛の舌 荊口

そう言えば、会長の句に、

吐く息の白きを牛の舌舐める 健

というのがありましたね。もっとも、季語は「息白し」で冬ということになりますが…。

会長 > 「稲妻や…」、

暗い所では、表情をつくったりしませんから素顔です。無防備な顔で、思いがけなく稲妻に照らされて、その顔が暴露されてしまったのです。

「朝露や…」、

牛は身近な存在でした。手を舐めさせたり、顔を舐めさせたりします。汗の顔を舐めて、塩分を補給するのです。

高橋 > 有難うございます。

本日も楽しく学習させて戴いている内に、お時間が来てしまいました。

今やっと、学習行程の半分を過ぎた所に差し掛かりました。紅緑の「滑稽俳句集」にどんな御感想をもたれたか、今後の私達の平成の句作にいかにかかせてゆくべきか、お教え願えたらと思います。

会長 > こんなにもたくさんの滑稽句を読むことが出来て、ありがたいことです。

何を滑稽と思うかは、時代によって異なり、個人差もあります。滑稽もさまざま。江戸から明治にかけての滑稽句が、どのようなものだったのか、知っているかいないかの違いは大きいですね。紅緑の句集を解説することは、いつか血となり肉となるはずです。